

「アフリカに哲学は存在するか」

“Is there a philosophy in Africa?”

河野 哲也*

KONO, Tetsuya

【要旨】 本論では、「アフリカに哲学は存在するか」という問いをめぐる現代のアフリカ哲学の論争を紹介することを目的にする。古代エジプトのヨーロッパとアフリカ全土への影響力を考えれば、アフリカには確かに哲学の歴史が存在したと言える。現代のアフリカにおいても大学での講壇哲学は存在してきたし、存在している。問題は、サハラ以南のアフリカの多くが無文字社会であることから、その伝統的な思想・宗教・世界観を哲学と呼ぶことができるかという点に絞られる。いくつかの批判があるとは言え、賢者の哲学が示唆するようなアフリカにおける口承的な批判の伝統を考えたときには、それらの伝統的な思想・宗教・世界観も哲学的営為の成果であると言える。さらにその伝統を現代的に解釈する作業も行われている。口承的な伝統を持つ社会においても哲学の根本特徴とされる批判的思考は成立する。こうして、アフリカ哲学は、西洋哲学、とくに書字と天才崇拜に基づいた西洋哲学の伝統を脱構築するのである。

キーワード:

アフリカ哲学、世界哲学、エスノフィロソフィー、西洋哲学の脱構築、哲学の定義

1 はじめに：アフリカへ問いと世界哲学

本論では、「アフリカに哲学は存在するか」という問いをめぐる現代のアフリカ哲学の論争を紹介することを目的にする。

「アフリカ（という場所）に哲学は存在するか」という問いと、「アフリカ人（黒人）による哲学は存在するか」という問いと、「アフリカ（的）哲学は存在するか」という問いとでは、後に述べるように、微妙に解答が異なってくる。この違いにもアフリカの哲学の歴史と現状が反映されている。しかしいずれにせよ、それらのアフリカへの問いかけは、「では、そもそも哲学とは何か」という問いとして、哲学を無自覚のままに西洋的な枠組みで捉えている者へと跳ね返ってくる。「アフリカに哲学は存在するか」という問いは、現在の哲学のあり方への根源的な批判と、その脱構築と再構築の要求になりうる。この問いを検討することにより、来たるべき世界哲学の発展のためのひとつの礎石としたい。

* 立教大学文学部教育学科

ここでいう現代のアフリカ哲学とは、20世紀以降の、アフリカ大陸在住者とアフリカン・ディアスポラによる哲学的営為を指す。アフリカ大陸在住の黒人による哲学を「アフリカ哲学 African Philosophy」と呼ぶことに対して、アフリカン・ディアスポラによる哲学を「アフリカーナ哲学 Africana philosophy」と呼ぶ者もいる。だが、本論ではその区別をあまり厳密にせず、すべて「アフリカ哲学」と呼ぶことにする。アフリカの哲学は、北アフリカにおけるイスラム文化に基づいた哲学、サハラ以南の地域での哲学、アフリカ大陸の外（欧米、カリブ海諸国）で発展した哲学に大きく分けられるが、イスラム文化圏の哲学は本研究の主な課題としない。それは、イスラム教思想の範疇で扱うべきであると思われるからである。地域的には、サハラ以南のアフリカと、欧米のアカデミズムで展開された哲学、カリブ海諸国で展開された哲学を扱うことにする。

また、今述べた「世界哲学」とは次のような企画を指す。すなわち、現代社会における哲学思想への関心は、これまで、いくつかの有力な文化圏、西洋、中国、インド、イスラム文化圏の哲学思想にのみ向けられてきた。しかし世界のさまざまな社会と地域とで、固有の思索的活動が存在し、それらは、一般性を持った大きなテーマと、対話性や自己反省性を伴っている点で、哲学的な活動と呼んでよいものである。そこで私たちの視野を広げ、世界のさまざまな地域と文化で育まれてきた哲学的思索を掘り起こし、その多様な視点、思考、態度を相互に対話させる試み、あるいは、そのプラットフォームを構築しようとするのが、世界哲学である。この運動は、世界の多極化とグローバル化の反映でもある。現代の世界では多極化・多元化が進行し、哲学においても「世界哲学」(Garfield & Endelglass 2011；伊藤他 2020) が興隆し、先進諸国の哲学科ではもはや西洋哲学ばかりが研究されてはいない。

世界哲学の方法論として、筆者が提案するのが「知の三点測量」である。たとえば、西洋の近代化に対してアフリカがどのように解釈しどのように向かい合ってきたかを知ることによって、同じく西洋の近代化に対して日本や東アジアがとってきた解釈や対応を相対化して理解できる。現代テクノロジーについて、アフリカがどのような解釈と受容を示したかを知れば、日本のテクノロジーの受容と発展をより広い自由な枠組で特徴づけられる。筆者は長年、現代の西洋哲学を研究してきたが、たとえば、専門である心についての西洋の哲学や諸科学は、著しく西洋近代の文化枠組に拘束されている。だが西洋の研究者のほとんどは、日本の研究者も同様に、他の文化圏の心の概念や心身関係についての別の見方を参照しようとはせず、自らの枠組を超えられないでいる。筆者の「知の三点測量」という考えはこの反省から生まれた。二項間の比較は、二項間の政治的・経済的關係も含む既存の關係に左右されやすい。三点測量は、二項間の關係を客観化し、その暗黙の前提も明るみに出すことができる。本研究は、ただアフリカ哲学を紹介するのではなく、知の三点測量の一点をアフリカ哲学に求めることで、私たちの哲学を新たな光のもとで捉え直すことを目的とする。アフリカ哲学はこうして、さまざまな新しいテーマと、新しい視点と新しい思考法をもたらしてくれるであろう。

では、なぜアフリカなのか。第一に、日本ではアフリカの哲学がまったく知られていないという、あまりに大きい知的空白を埋めるためである。日本では、F・ファノンを除き、アフリカの哲学を論じた研究がほとんどない(Fanon 1952/1970)。日本のアフリカ学は文化人類学と政治学・経済学が中心である。他方すでに欧米では、ブラックウェル、ラウトリッジ、オックスフォードといった出版社からアフリカ哲学の優れたアンソロジーが、2000年を前後して次々に出版されている(Coetzee and Roux 2003； Eze 1997b, 1998； Wiredu 2004)。たしかに、日本とアフリカと

は地理的・歴史的に縁遠かったのは間違いないが、グローバル化する現代世界において、最も長い人類史をもつ大陸の哲学に無知であることは、憂うべき状態である。

第二に、日本における近代的な啓蒙主義の負の側面についての未整理と反省不足故に、である。画一的なシステムと文化を暴力的に押し付け、現地の社会を分断し、その文化的遺産を無力化し、地元の人々と自然を搾取する植民地主義は、近代啓蒙主義の負の側面である。啓蒙主義の哲学と自然学は、聖書の影響下で階層的なシステムとして自然を分類する傾向に支配されており、人類の最上位に白人を置き、そこに合理性や道徳性の高次の特徴を見ようとする。イジは、啓蒙主義の哲学者に見られる黒人蔑視的な思想を集積している (Eze, 1997a)。

個人的な経験を言えば、筆者が留学していたベルギーの大学では、アフリカから多くの留学生が来ていたが、彼らは哲学のテキストの中に西欧中心主義や植民地主義につながる言説を見つけると厳しく批判していた。筆者が留学から帰国して違和感を覚えたのは、日本では西洋哲学の暗部があたかも存在しないかのように研究されていることであった。現代のアフリカ哲学は、西洋近代哲学の根源的批判から始まる。黒人に対する人種差別の背景には、アフリカの社会と文化に対する体系的で継続的な価値の切り下げがある。西洋の近代化を支えたのが植民地支配であり、そのなかでアフリカの社会と文化は一貫して価値が低いものとして蔑まされてきた。この支配は、哲学的・思想的な次元でも行われてきた。デイヴィッド・ヒューム、アダム・スミス、イマヌエル・カント、G・W・F・ヘーゲル、ハーバート・スペンサーなどの18～19世紀の名だたる哲学者たちが、アフリカ人に対する人種差別的言説を表明し、思想的に植民地支配を後押ししてきたのである。これらの哲学者の暗黒面については、まるでなかったかのように素通りされているが、ハイデガーや京都学派の哲学者が第二次世界大戦やその時期の人種差別に加担していたことを厳しく責められていることを考えれば、これは著しくアンフェアである。

日本は明治維新以来、文明開化・富国強兵を掲げ、西欧の近代化を見習いながら、同時に、その植民地主義や、人種主義、自文化中心主義をも受け継いできた。この流れは、第二次世界大戦後においても基本的に変わらない。平和こそ希求するようになったものの、人種や民族を階層的に上下に配置する傾向はそのままである。西洋中心主義に対する批判があっても、それはしばしば、日本あるいは東アジアの伝統への回帰といった二点測量に基づいた反動に陥り、自文化中心主義をかえって強めてしまう。日本の哲学は、西洋近現代哲学の暗部には目を伏せ、その強化に拍手を送ってきたとあってよい。日本社会におけるアフリカ人が被っている困難への無関心は、アフリカに対する体系的な価値切り下げの一側面なのである。日本の哲学、一般的に日本の社会は、アフリカなど開発途上の国々の文化や思想にほとんど関心を寄せず、体系的に無視している状態にあるが、これは植民地支配への反省不足と一体の傾向とあってよいだろう。

そこで、本論では、「アフリカに哲学は存在するか」という問いを取り上げ、同じくかつての「日本に哲学は存在したか」という問いを思い出しながら、現在の西洋中心的な哲学思想のあり方を反省することにした。

2 アフリカ哲学の歴史

「アフリカに哲学は存在するか」という問いに対しては、歴史を見れば、少なくとも「存在している」というのが、当然の正解である。

哲学の起源を古代ギリシャに求めるのは、中国やインドなどの地域の哲学を無視していると同様に、ギリシャが属している地中海地域の歴史の見方としても偏っていると言えるだろう。詳しくは別稿に譲るが、エジプトでは、紀元前 27 世紀から 22 世紀にかけての古代王朝において、すでに「哲学者」「賢者」という名称が使われ、真理や宇宙、人間や倫理についての思索があり、その教えは歴史的に叙述され、体系づけられていたという (Obenga, 1998)。例えば、「真理」に近い含意を持つ、アフリカの「マート (Maat)」という概念は、エジプト、エチオピア、コンゴ、中央アフリカ、ギアナ、カメルーン、ガボン、ナイジェリア、スーダンの各地の言語に見出される。この概念は、公平性、真面目さ、真実性、真理、正しさといった含意を持つが、これについての考察はすでにこの時期に見られるという。マートの概念は、現代のアフリカ哲学でも重要である。古代ギリシャの文明は、以上のような古代エジプトからの影響を抜きにしてありえないであろう (Olela 1998 ; Obenga 1998)。

私たちに馴染みのある古代ギリシャ・ローマ期においても、エジプトを始めとしてアフリカ大陸の地中海沿岸部では、優れた哲学者が生まれ活動している。よく知られているのは、アレキサンドリアのオリゲネス、カルタゴのテルトゥリアヌス、リコポリス生れでアレクサンドリアで学んだプロティノス、カルタゴ生れでヒッポで司祭となったアウグスティヌスといったキリスト教父の哲学者であり、彼は現在のエジプトやチュニジア、あるいはローマといった都市で活躍した。歴史に残っている初めての女性哲学者であるヒュパティア (Hypatia, 350(?)~415) も、アレクサンドリアで活躍した新プラトン主義の哲学者であり、数学者・天文学者である。テオドシウス一世が非キリスト教の宗教施設・神殿を破壊する許可を与えたため、キリスト教の暴徒によって酷い殺され方をされた悲劇もよく知られている。

植民地主義が始まる前の近世においてもアフリカは重要な哲学者を排出している (Masolo 1994, 1998)。たとえば、一七世紀のエチオピアには、有神論的合理主義を唱え、反キリスト教的なゼラ・ヤコブ (Zera Yacob, 1599-1692) が登場した。その弟子のワルダ・ハイワット (Walda Heywat, 17 世紀) は、倫理や知恵、心理や教育について論じた。一八世紀では、ガーナ出身で、ドイツのハレ大学やイエナ大学で学び、そこの教師を務めたアントン・ウィルヘルム・アモ (Anton Wilhelm Amo 1703-1759) が有名である。アモは、デカルトの心概念を批判し、感覚知覚を心に帰属させない経験主義哲学を唱えた。アモについては、現代のアフリカの哲学者による研究も進んでいる。同じく同時代でも、アラビア語による哲学、イスラム科学やイスラム哲学の伝統については、長らく無視されていたが、北アフリカにおいて発展を遂げていたことが、現在では確かめられている (Diagne 2004)。

以上の哲学は、主に北アフリカを中心としているが、サハラ以南のアフリカではどうであろうか。セネガルの歴史家・民俗学者であり、政治家であったシェイク・アンタ・ジョップ (Cheikh Anta Diop, 1923-1986) は、古代エジプトは黒人の文明であり、サハラ以南のアフリカ文化の発祥地でもあるというアフロセントリズムを唱えた。ジョップは、当時の欧州歴史学における「アフリカには歴史がない」という言説に批判するために、ドゴン研究で知られるパリ大学の民俗学者マルセル・グリオールのもとで学び、『黒人の国家と文化』(Diop 1955/1979)を世に問うた。ジョップは、アフリカ文化が全体として連続性と共通性をもっており、人類史においてきわめて重要な役割を果たしたと指摘する。ヘーゲルのようなアフリカを歴史の彼方に追いやる西洋中心主義的な歴史観は厳しく退けられる。彼の著作は大きな反響を呼び、その実証性についても多くの論争

や反論を巻き起こした。また、マーティン・バナル (Bernal 1987/2007; 1991/2004) は、『ブラック・アテナ』という著作において、古代ギリシャは非西洋中心の混成文明によって発展したのであり、これを西洋文明のもとにおくのは歴史的捏造であるという主張を行った。以上の歴史書の詳細の真偽については歴史家ならぬ身には検証しがたく、その意味については稿を改めて論じる必要があるが、膨大な資料に支えられた大著は、これまでの西洋中心主義的な歴史を相対化するのに十分であろう。

西欧によるアフリカの植民地化は、まさしく西欧の啓蒙主義時代と重なる。啓蒙時代とは、アフリカ人にとっては、植民地主義と帝国主義、奴隷売買がなされた時代であった (宮本・松田 2018)。カール・フォン・リンネの人種分類をはじめとして、アダム・スミス、ヒューム、カントなど、十八世紀に活躍した科学者・哲学者の言説の多くに、アフリカに対する差別的眼差しと偏見が含まれている。十九世紀初頭には奴隷貿易はイギリス、アメリカ、オランダ、フランスと次々に廃止されていったが、その時代にあっても、人種不平等論のアルテュール・ド・ゴビノーはもちろん、アメリカ独立宣言を起草したトマス・ジェファソン、社会進化論のハーバート・スペンサー、そしてヘーゲルの歴史哲学など、アフリカ人蔑視の哲学的・科学的言説は流布され続けた。こうして、近代においては、西洋哲学の主流が人種差別を正当化する思想的な基盤を与え続けたのである。

悪名高い一八八四年のベルリン会議で、七つの欧州列強によってリベリアとエチオピア以外が分割される (アフリカ分割)。この体制は第一次世界大戦終了まで続く。この時期に、アフリカ、アメリカ合衆国とカリブ海諸国において、汎アフリカ主義 (パン・アフリカニズム) が興隆する。パン・アフリカニズムとは、世界に散らばったアフリカ系住民 (アフリカン・ディアスポラ) の開放と連帯を訴える政治的かつ思想的なアイデンティティ運動である。

たとえば、エドワード・ブライデン (Edward Wilmot Blyden, 1832-1912) は、リベリアの思想家で、外交官、政治家であり、汎アフリカ主義の父とされる。アレクサンダー・クラメル (Alexander Crummell, 1819-1898) は、アフリカ系アメリカ人のイギリス国教会派聖職者であり、汎アフリカ主義を発展させた。イギリス軍外科医であったアフリカヌス・ホートン (Africanus Horton, 1835-1883) は、西アフリカのクリオ民族主義作家として人種主義への反論と自己統治を主張した。「クリオ Krio」とはシエラ・レオーネに住むクレオール人のことである。ジョン・サルバー (John Mensah Sarbah, 1864-1910) は、現ガーナの黄金海岸の法律家であり政治思想家であった。彼は、先住民の権利保護団体を作り、ガーナ独立を訴えた。同じくガーナのジョセフ・ヘイフォード (Joseph Casely Hayford, 1866-1930) は、ジャーナリスト、法律家、政治家、教育者であり、植民地統治や奴隷制を批判し、汎アフリカ主義の思想を展開した。

この思想運動の影響のもとで、1900年にロンドンで最初の汎アフリカ会議が開催されると、第一次世界大戦後には立て続けに開催されるようになる。第二世界大戦後の一九四五年に開かれたマンチェスターでの第五回会議には、アフリカ諸国の代表が多数参加した。以降、第二次世界大戦勝利への貢献を背景にして、アフリカ各国では旧宗主国からの独立を要求するようになる。1960年に、国連が「植民地と人民に独立を付与する宣言」を採択し、その後、1980年までにほとんどのアフリカの国が独立を果たすようになる。

以上のようなアフリカにおける哲学思想の運動の長い歴史と、植民地主義を跳ね返そうとする政治思想の興隆を公平に眺めるならば、「アフリカに哲学がない」と唱えることは歴史と事実を

見ない発言だと言える。

とはいえ、古代エジプトの哲学が、いかにアフリカ全体に影響を及ぼしたと言っても、はるか数千年前の話である。現在のアフリカ人の誰も実感を持ってないあまりに遠い話であろう。近世と言っても、ヤコブやアモでも数百年前の17世紀の人物であり、デカルトの時代の哲学者を現代のアフリカ人が身近に感じることはないだろう。19世紀の汎アフリカ主義は思想であると言っても、「哲学」と呼ぶにはあまりに政治的であり、現実の脱植民地闘争に密着しすぎている。それは、イデオロギーにすぎない、哲学としての思弁性に欠けている、と言う人がいてもおかしくないだろう。

それゆえ、「アフリカに哲学があるか」という問いは、第二次世界大戦後のアフリカ哲学の大きなテーマのひとつであった。だが、そうした問いが生じたのは、植民主義の時代とその後にも続いた西洋による差別的な扱いによって、アフリカ社会とその文化が体系的かつ持続的に価値を剥奪され、アフリカの知的営為を判断する独自の基準を無効化されたからに他ならない。モガベ・ラモーセ (Ramose 2003) が指摘するように、「アフリカに哲学はあるか」という問いそのものが、西洋の、あるいは西洋化された視点からの脱価値化の眼差しの産物なのである。

ところが、実は、この問いは、近年、アフリカの哲学の世界ではあまり問われなくなった。この数十年で、現象学や分析哲学、社会哲学など現代哲学を身に着けたアフリカーナ哲学者が、多数、輩出したこと、伝統と西洋的な近代性との折り合いが付き始めてきたことなどがその理由としてあげられよう。しかし、日本においてそうであるように、いまだに世界には、「アフリカに哲学などあるのか」という素朴な偏見をもつ者も多いし、アフリカの哲学がアフリカ人以外に熱心に研究されているともいい難い。そこで、以下では、「アフリカに哲学はあるか」という問いに対するアフリカの哲学たちの応答を試みることしよう。

3 エスノフィロソフィーを巡る論争

アフリカの伝統的な宗教や神話、説話、教えや箴言の中に、世界観、生命観、人生観、人生訓、社会観、社会のあるべき姿についての思想があることを否定する者はいない。アフリカには哲学がないと蔑んできた人々も、このことを否定することはない。そうすると、問題は、この思想を、「哲学」と呼んでよいかということである。アフリカに哲学はあるかという問いは、したがって、哲学の定義をめぐる問題でもある。そして、アフリカに近代的な大学ができて以来、あるいはアフリカ人がヨーロッパなどに留学して以来、西洋哲学を学び研究したアフリカ人がいたし、現在もいることを否定する者もない。したがって、問題は、「アフリカに固有の現代哲学があるか」あるいは「アフリカ哲学とは何か」という問いなのである。

「アフリカ哲学とは何か」という問いは、1945年に出版されたプラシード・タンベル (Placide Tempels, 1906-1977) 『バントゥ哲学 (Bantu Philosophy)』(Tempels 1945/1959) が出版されたことを契機として生まれた。タンベルは、ベルギー生まれで、ベルギー領コンゴで三〇年活動したフランススコ会宣教師である。彼はアフリカ人でも、哲学を専門とする者でもなかったが、その著作でアフリカの伝統的な宗教や教えの中に、一種の存在論や世界観、そして独特の思考法を見出し、それを「哲学」と呼んだのである。この著作の詳細も別稿に譲らなければならないが、タンベルによれば、アフリカ文化の基底には以下のような特徴的思想がある。すなわち、絶対的な存在であ

る一者としての神が、その創造的力によって生きとし生けるものに生命力を与えている。生命は創造的な存在であり、その内なる生命によってすべての力は結びついている。力は生命的であり、それは本質的に関係的に働く。個々人が孤立した魂を持つといった西洋近代的な個人主義は、この力と生命の原理を理解できない。アフリカにおいて知恵と知識とは、この存在＝生命についての知識に他ならない。

タンベルのアフリカ文化の解釈は、ポーリン・J・ハウントンジ (Paulin J. Hountondji, 1942-) によって、「エスノフィロソフィー (ethnophilosophy)」と呼ばれるようになる。アフリカの伝統的な文化の中に含まれている哲学的なテーマ、すなわち、存在論 (形而上学)、認識論 (知識論、真理論)、生命観、人間観、倫理 (道徳観)、社会観などを抽出し、明示的にあるいは暗黙の内に、西洋の伝統や思考法と比較しながら、アフリカ的な概念や発想、思考方法を取り出そうとするのが、エスノフィロソフィーである。あるいは、セネガルの初代大統領であり、詩人であるレオポール・セダール・サンゴール (Léopold Sédar Senghor, 1906-2001) のネグリチュードの哲学もエスノフィロソフィーの先駆に数えられることができるであろう (Towa 1971)。

この流れに、コンゴの哲学者であり、構造主義的で歴史横断的な観点からのアフリカ哲学の再構築を目指すムディンベ (Valentin-Yves Mudimbe, 1941-) が記した 1960 年代後半から 70 年代にかけてのネグリチュードに関する諸論文 (Mudimbe 1964, 1970, 1988)、さらに、ルワンダの哲学者・神学者であり、詩人、政治活動家としてツチ文化を指導するアレクシス・カガメ (Alexis Kagame, 1912-1981) の『存在についてのバントゥ＝ルアンダの哲学』(Kagame 1956)、『比較バントゥ哲学』(Kagame 1976) が属すると言ってよいだろう。

エスノフィロソフィーは、文化人類学による宗教研究をモデルにしている。そこから生じる第一の問題は、アフリカ人は自身の宗教や文化をどう生きているのかという観点から語られがちなことである。それは、文化人類学と同じく、アフリカ人の視点からのナラティブになりがちである。第二の問題は、アフリカの思想に関する情報は多様であり、集めにくく、まとまって保存されていない点である。それらは、インフォーマルな個人ベースの記述になってしまいがちで、民族や社会に共通する傾向がとりだすまでに至っていない。そこから無理にアフリカ文化の共通特徴をとりだそうとするならば、多様なアフリカ文化を性急に一般化し、そのアフリカの特徴を強調しすぎる傾向に陥るだろう。さらに、エスノフィロソフィーは、政治的理由から、アフリカの文化的な擁護や、独立を目指す民族主義的・国家主義的イデオロギーとなる傾向がある。そうした傾向が性急な一般化と結びついた場合には、研究として好ましくないものになるだろう。

エスノフィロソフィーに対しては、アフリカの哲学者から批判や支持のさまざまな反応が寄せられた (Deacon 2003)。

その発表の後すぐに、とりわけ 70 年代から 80 年代初頭までに、アカデミズムの代表的な哲学者が、批判的な考察を表明した。たとえば、フランツ・クラエ (Franz Crahay) は、「バントゥ哲学にとっての概念的出発の条件」(Crahay 1965) という論文で、哲学を、「明確で、抽象的な分析がなされ、厳しく批判的・自己批判的であり、体系的で、人間の条件、経験、意味や価値を扱うものだ」と定義したあとで、バントゥ哲学には以下の概念的な分離が不十分だと指摘する。すなわち、①主観と客観の分離、他者と自己の分離、②自然と超自然の分離、③時間と空間の分離、④自由と責任の概念の発達、⑤単純化や差異の拘泥への誘惑を断ち切ることで、である。哲学たりえるには、現代哲学のイノベーションを行い、偉大な哲学的伝統へ貢献しなければならないとい

う。クラエのバントゥ哲学批判は、現代の観点から見ればかなり西洋哲学の伝統的枠組をそのまま踏襲した立場からのものという感がする。

タンベルらの哲学を「エスノフィロソフィー」と名付けたのは、先に触れたように、ベナン国立大学で長く教えたホントンジである。彼は、さらに厳しくエスノフィロソフィーを退ける。

彼によれば、エスノフィロソフィーは以下のような特徴を持っている。すなわち、(1) 個人の思想的営為ではなく、集団の思想である。(2) リソースとして、それは近代化以前の口承文学であり、学術的に書記されていない。(3) 思想を伝統として固定したものとして捉え、それを解釈するだけで、古いものを乗り越え真理を目指す運動ではない。ホントンジは、これが文化人類学や民族誌として提示されるなら何の問題もないが、それが「哲学」であると主張されたときには、大きな問題となると考える。それは、アフリカの哲学が、批判的、反省的、合理的、科学的、そして進歩的な性質を持っていないことへの言い訳になってしまうというのである (Hountondji 1970, 1996, 2002, 2013; Mosley 1995)。

また、80年代になると、ガーナと数多くのアメリカの大学で哲学を教えたクワシ・ウィルドゥ (Kwasi Wiredu, 1931~) は、アフリカの伝統文化に基づくエスノフィロソフィーは、科学的認識に大きく劣っており、哲学の条件たるべき自己批判が弱いと厳しく批判する (Mosley 1995; Wiredu 1980, 1996)。エスノフィロソフィーは、西洋の科学的な哲学には比較することはできず、比較できるとすれば、西洋文化に対してである。ウィルドゥによれば、現代のアフリカには書記による哲学の伝統、すなわち、哲学書がない。教育と訓練を受けた哲学者は、西洋的な概念枠に基づいた思考を行っており、アフリカ伝統思想もそのような概念枠で解釈されてしまっているという。

上記のバントゥ哲学批判の中でも、ホントンジの批判は、70年代から80年代初頭まで多くの人に強い影響をもった。だが他方で、ケニアの哲学者であるオデラ・オルカ (Henry Odera Orika, 1944-1995) は、こうしたバントゥ哲学批判に対してすぐに反論し、バントゥ哲学を擁護した (Oruka 1990, 1991)。オルカは、フィールドワークを通して、アフリカの文化には、「賢者」と称される独自の哲学者がいたことを主張する。彼らはただ伝統や文化を受け継ぐだけではなく、批判的に分析し、それらを評価し、しばしば合理的な根拠から反対を表明する存在であった。オルカによれば、ホントンジは、文字を持たない社会では伝統的な信念が強化される傾向にあるのに対して、文字社会では、思考の独立性や多様性が促進されると信じているかのようである。だが、オルカはこれに異議を唱える。アフリカの賢者は、書物を記さなかったとは言え、宗教や社会的信念を、合理的・批判的に検討してきた。彼らは、神、宗教、身体と心、徳、善と悪、真実と偽り、幸福、生と死、正義などの哲学的基礎について独自の思考をしたのである。

バリー・ヘイレン (Barry Hallen) と J・オルディ・ソディポ (J. Oludi Sodipo) は、1986年に分析哲学の日常言語学派の方法でアフリカの言語を分析し、ヨルバ語に見られる認識論が、西洋の現代哲学が基礎としている英語などの言語に含まれている認識論と著しく異なることを指摘した (Hallen and Sodipo 1986; Hallen 2000, 2006, 2009)。

他にも多くのアフリカの哲学者が、アフリカ哲学における口承の伝統の重要な役割についての指摘をした (Deacon 2003)。そうして、1990年代初頭から、アフリカ哲学について、「口承伝統の資料だけに基づいて進める必要はないとはいえ、口承伝統はある意味ではアフリカ哲学にとって基礎的なものであり、それを哲学として主張する権利がある」というコンセンサスが生まれて

きたのである。西洋文化の帝国主義への抵抗し、脱構築することには大きな意味があると同時に、アフリカの文脈においてアフリカの知的遺産の特徴を活かすために、それに必要な方法論を取ってよいのだという認識に到達したのである。クワメ・ジェチェは、『伝統と近代：アフリカの経験に関する哲学的考察』(Gyekye 1997)の中で、アフリカの哲学を語ることは可能であり、アフリカの文化的伝統の中には、人間存在を根源的な次元において反省的に思考した賢者がいたことを示す。こうした考えに立てば、現在の私たちが勝手に想定しているように、哲学のアウトプットは書籍である必要はない。そのアウトプットは、「賢者」を生み出すことでもありうるのである。賢者は、哲学的思考を生み出す者でもあり、その思考によって生み出された「成果」でもあるのだ。

4 アフリカ哲学の4つの潮流

こうして、エスノフィロソフィーは一方で厳しい批判を受けながら、他方で、アフリカの文化や言語の基底にある哲学的概念や存在論、認識論を掘り起こしていく研究を生み出す起爆剤となった (Bassong 2007, 20013, 2014; Boulanga 1977; Brown 2004; Coetzee and Roux 2003; Janz 2009; Karp and Masolo 2000; Kodjo-Grandvaux 2013; Mana 2018; Mbonda 2013; Serequeberhan 1991)。

現代のアフリカ哲学には、エスノフィロソフィーに加えていくつかの潮流が存在する。多くの研究者が、アフリカの哲学の流れは次の四つにごく大まかに分類できると指摘する (Coetzee and Roux 2003, Chap. 2; Serequeberhan 1991)。

一つは、今説明したエスノフィロソフィーである。二つ目に、汎アフリカ主義の運動以来の政治哲学、政治思想、社会哲学、民族自立を促す哲学である。三つ目には、賢人 (sagacity) の哲学である。これは、伝統的なアフリカの諸宗教に共通して見られる「賢さ」を哲学ないし倫理として追求する立場である。第四に、大学で講じられる講壇哲学である。たとえば、オルカ (Oruka 1990) も、次の4つの流れが現代のアフリカ哲学にはあるという。①エスノフィロソフィ：特定のアフリカ社会ないし分全体の世界観や思考システムを記述する。②賢者の哲学：宗教的なアフリカ思想家であり、近代教育を受けていない。共同体のコンセンサスよりも合理性や元来の洞察力によって自分の思考と判断を導く批判的で独立した思想家の哲学。③民族的なイデオロギー：人間的な社会主義的秩序を創造しようとした政治家や政治活動家が含まれる。ここに、反アフリカ主義、ネグリチュード、アフリカヒューマニズム、アフリカ社会主義、科学的社会主義、良心主義 (Conscientism) も含めるべきだという。④職業的哲学者。

以上の分類は、近年、次々と出版されたオックスフォードやラウトリッジのアンソロジーでも採用されている。現在では、アフリカ的な概念を西洋的な概念と比較する、非常に洗練された比較哲学的な研究がたくさん出版されている。例えば、エマニュエル・イジ (Emmanuel Eze) の合理性についての比較哲学的な労作は、西洋の合理性概念を脱構築するものである (Eze 2008)。

5 アフリカ的な哲学とは何か

では、ここで最初の問題に戻り、アフリカに哲学は存在すると言えるのだろうか。過去を振り

返れば、「存在した」と言えることは先程確認した。では、現代のアフリカではどうだろう。アフリカ大陸にも近代的な大学制度はすでに根付いており、その中で哲学を研究し教育している大学教員は、多数存在している。あるいはアフリカ出身者だが西洋的な教育を受け、西洋のアカデミズムの流れの中で、アフリカ大陸以外の場所で仕事をしている研究者はたくさんある。この意味で、「アフリカに哲学は現代でもある」、「アフリカ人による哲学は現代でもある」と言うのは簡単である。しかし問題は、単にアフリカ人が生み出したというだけでなく、またアフリカが生産の場所であるというだけでなく、アフリカ「の」哲学、あるいは「アフリカの」哲学はあるのだろうかという問いである。そこには、「アフリカ的なテーマを扱う哲学」「アフリカを哲学の対象とする哲学」「アフリカ的な概念枠や思考法を用いた哲学」が含まれるだろう。西洋哲学ではなく、それとは異なるアフリカ哲学はあるのだろうか。あるとすれば、それはどのようなものであろうか。

多くのアフリカの哲学者は、他の国の哲学者と同様に、哲学は人類に共通する知的態度に根ざしていると考えている。そこに含まれると考えられているのは、以下の特徴である (Gyekye 1987, Imbo 1998, 2002, Lalèyè 2003, Maurier 1984, Onyeweunyi 1991)。

- (1) 一般性 (あるいは、普遍性) : 自分の周囲のものごとの全体に一定の秩序や意味を与えようとする。一般的・普遍的な問題を扱う。古典的には、宇宙の秩序の原理や宇宙における人間の地位への関心がそうである。超領域性、分野横断性は、この現代的表現である。
- (2) 批判性 : 所与の説や現状を再検討する。懐疑主義、対話主義、自己への批判としての反省性もここに含まれる。神秘主義に対する科学的な合理性も批判性の発揮と考えられる。批判性が開始される地点として「驚き」、すなわち、日常性から距離化があげられることはしばしばである。批判に対して「開かれた」性質をあげることもできるだろう。
- (3) 体系性 : 一定の原理に基づいており全体が整合している。一貫性としての合理性はここに含まれる。

(1) は、宗教や神話体系と共通の傾向であり、(2) は科学と共通の傾向であり、(3) は、人間の知的活動のさまざまな局面 (数学、論理、法体系、科学、神話体系など) に現れる一般的な傾向とすることができるだろう。

さて、アフリカに限らず、宗教的説話や神話体系が、(1) と (3) の特徴をもっていることが広く認められるところであることは、レヴィ=ストロース (Lévi-Strauss 1962) をはじめとして、20世紀以降の文化人類学の示すとおりである。アフリカの伝統的な宗教観や世界観についても同様である。すると、問題は (2) であり、(2) を科学性、実証性と結びつけて考える人、たとえば、先のウィルドゥは、宗教や神話体系を元にしてエスノフィロソフィーに対して批判的になり、そのようなものは文化とは言えても、「哲学」とは言えないと考える。(2) の条件として思想が書籍として記されていることを求めるホントンジも、同様の結論を与えたことは先に見た。

しかし、1959年にローマで開催された第二回黒人作家・芸術家会議 (Second international congress of negro writer and artists) において、哲学委員会は以下のような声明を出した。「黒人作家・芸術家会議」は、植民地主義、奴隷制、ネグリチュードの問題を扱うための会議であり、第一回大会は1956年のパリで開催された。第二回の以下の決議は哲学にとって重要である (Cf. Outlaw

1996b)。

文化の発展における哲学的反省が果たす役割の多くの部分を鑑み、これまで西洋が哲学的反省の独占を主張し、それ故、哲学の試みがもはや西洋が培ってきた範疇の枠の外で行われることを鑑み、伝統的なアフリカの哲学的営為は生きた態度の中に反映し続け、決して概念だけにとどまるものではなかったことを鑑み、哲学委員会は次のことを宣言する。

- (1) アフリカの哲学者にとって哲学は、アフリカの現実を西洋的体系に還元することからなっているのではない。
- (2) アフリカの哲学者は、自分たちの探求を、西洋的な哲学のアプローチが唯一可能なものではないという根本的な確信に基づけなければならない。したがって、
 - (a) アフリカの哲学者は、人々の伝統、説話、神話、ことわざから学ぶべきであることが促されなければならない。それは、他の人間の英知を補うように、それらから真のアフリカの叡智の諸指針を引き出し、アフリカ的思想の独特の範疇を引き出すためである。
 - (b) アフリカの哲学者には、西洋の全体主義的、ないし自己中心的な哲学者に対して生まれがちな劣等感を持たずにいることを求める。劣等感は、哲学者をして外国での貢献によって自分のアフリカの存在を創始することを妨げる。

ここで表現されているのは、「西洋的体系に還元しない」「西洋的なアプローチが唯一ではない」といった言葉に見られる西洋哲学の脱構築の主張と、アフリカ独自の概念や思考法を伝統文化から引き出そうとする態度である。エスノフィロソフィーは肯定的に受け取られる。

西洋哲学の脱構築は、西洋中心主義や植民地主義と結びついている。論理的、美的、倫理的、形而上学的な秩序は、各社会がどのように生を営んでいるかによって異なったものでありうる (Onyeweunyi, 1991)。アフリカにはアフリカ独自の生の秩序の付け方が存在し、それをめぐる論理的、美的、倫理的、形而上学的、認識論的秩序があると指摘する。また、イムボ (Imbo 1998, 2002) は次のような指摘をしている。ヨーロッパ的合理性が普遍性を唱え始めたのは、啓蒙主義の時代からである。哲学は西洋が普遍を唱え始めた時点で、哲学の反省的性格を忘れ、むしろ非哲学化され、植民地主義のイデオロギーとなった。西洋の近代哲学は、こうして自らの罪を隠す、硬直した自己正当化の手段となったというのである。イッシアカ=プロスペ・ラレイエ (Lalèyé 2010) も、西洋のいわゆる「大文字」の哲学に見られる天才信奉の問題点を指摘している。

アフリカ独自の伝統的な概念、宇宙や人間、生命についての考え方に基づいた哲学を、現代社会の文脈で発展させることは、それ自体が西洋哲学のよい積極的な脱構築につながるだろう。アンソニー・カヌ (Kanu 2018) に言わせれば、オルカ、ンコメ、ムディンベといったアフリカ哲学設立者たちは、西洋の大文字の哲学の脱構築を目指していたというのである。

同じ主張が、アンリ・モーリエ (Maurier 1984) のかなり以前の論文にも見ることができる。彼によれば、まだアフリカには哲学がないとされるのは、哲学の条件とされる反省性、合理性、批判性、体系性が伴っていないからであるが、しかしアフリカ人は、西洋哲学の提示するテーマや主張に関心をもてないことが多い。アフリカ的思想は人間中心主義的である。しかし、それはデカルトのような、独我論的で孤立したコギト中心主義ではなく、人間が共同体を作ることに多くの関心を持つ思想である。また、アフリカではコスモロジーには多くの関心が寄せられても、西

洋的な知識論、普遍、哲学的批判などはアフリカ人が関心を持つテーマではない。アフリカ人は、むしろ、人生や生命といったものに強く関心を持つ、いわば生命主義者なのだ。アフリカ人は共同体の重要性を強調するが、しばしば誤解されているように、集団主義や同調主義からは遠い。アフリカ人は、主観や個人が、自己充足的で、自律的、自由で、競争的なものとして捉えず、社会の中の不断の交流を通して、人間関係によって陶冶されてくると考える。したがって、アフリカ的な哲学の発展があるとすれば、そうした西洋的な個人主義の概念枠においてではなく、他者と世界との関係を維持する生命的な関係という概念枠においてである。そして、こうした概念枠を作り出すことが、普遍的な世界への貢献となるだろう。アフリカの哲学は、連帯、共同体主義、伝統主義、参与を重視する。アフリカの共同体主義は、参加することによってより個人が成長するという考えである。

だが、じつはアフリカ的な概念枠、世界観、社会観、人間観、個人観を展開するべきだという点においては、エスノフィロソフィーを批判するウィルドゥやホントンジも同じ主張をしている。この数十年で、アフリカ独自の概念を活かした哲学は、分析哲学や現象学といった現代哲学の枠組みの中でも興隆しつつあり、分析哲学の伝統を受け継ぐウィルドゥも、現象学的な研究を行うホントンジも自身らが、新しいアフリカ哲学を作り出しているといえる。

ヴァンダービルト大学のルーシュアス・アウトロー (Lucius Outlaw Jr.) は、現代のアフリカ哲学をアフリカ人とアフリカ起源の人々の哲学と定義しており、以下のような特徴があると指摘している (Outlaw 1996a, 1996b, 2007)。
①社会文化的セッティングに優先性を置く。
②歴史的・文化的なものに優先性を置く。
③他人種的・他民族的な比較に重きを置く。
④西洋一元主義への抵抗。
⑤アフリカ的なものの維持と再解釈という文化的ダイナミズムの重視。
⑥思考システムの比較文化的な分析。
このような傾向を持つアフリカ哲学であるが、テーマとしては以下のようなものがあげられる。

- ・文化の哲学：エスノフィロソフィー的テーマを含む
- ・形而上学（存在論）：神、祖先、魔術、人格、原因、観念論
- ・認識論：真理、合理性と論理、知識の社会学
- ・倫理学：道徳性、親族と社会、権利と義務、共同体主義
- ・政治哲学：自由と自律、経済と道徳、人種とジェンダー、アイデンティティ、法と宗教
- ・美学：アフリカ芸術の位置づけと評価

これらのテーマについての批判的な議論が、第二次世界大戦後のアフリカですでに十分に豊かに展開されている。そのなかにはアフリカ独自と言えるテーマ、あるいは、世界の他の地域と共通のテーマを扱いながら、独自の視角と思考法でアプローチしているものもある。

しかし「アフリカ哲学とは何か」という問いは、より政治的である。その問題は、むしろ、アカデミズムの中で活躍する哲学者に向けられる。とくに、ホントンジは、アフリカ哲学を、アフリカ人が書いたテキスト、とくに大文字の哲学によって記述されたものとみなす。あるいは、ピーター・ボダンリン (Bodunrin 1981) は、アフリカにおける西洋思想の検討はアフリカ思想といってもよいのではないかと主張する。しかし、アフリカ人が生み出せば、それは何であれ、アフリカ哲学であるという立場に対しては、強い批判も存在する。

たとえば、シェグン・バデゲシン (Gbadegesin 1991) は、アフリカ哲学の定義として、「伝統思想」、「職業的な哲学者による仕事」、「アフリカ人によって作られたテキストの総体」などの定義がありうるが、自分は以下のような定義を与えたいと主張する。①アフリカ概念システムに注目する、②本質的にアフリカで生じた問題を扱う、③現代のアフリカの経験に基づいている、④他の地域に対してアフリカの現実を、比較論的に研究し分析する。バデゲシンは、アフリカの発展に寄与しないものは、やはりアフリカ哲学と呼びたくないと主張するのである。

アフリカ人が作ったものであっても、西洋哲学を西洋哲学的な文脈で論じ、西洋哲学の世界の中で評価された哲学は、アフリカ哲学と言えるのか。これが、バデゲシンの問いかけである。近世で言えば、先に上げた、18世紀のドイツで活躍したアモは、西洋的なアカデミズムの中で認められたアフリカ出身の哲学の嚆矢であるが、この考えに立てば、アモの哲学は、西洋哲学であっても、アフリカ哲学ではないということになるだろう。

クワメ・ジェチェ (Kwame Gyekye, 1939-2019) も、アフリカ人による西洋哲学はアフリカ哲学とは言えないと指摘する。西洋人がインド哲学に生涯研究すれば、それはインド哲学への貢献だ。アメリカ人でも儒教研究者はいるが、それは中国哲学の発展であり、それをアメリカ思想だとは言えない。ホントンジが現代のアフリカ人に勧めているのは、西洋哲学への貢献に他ならない。

ジェチェによれば、アフリカ哲学は、アフリカ的な現実、すなわち、植民地以後の状況、産業化や近代化の軋轢といった問題を共有していなければならない。政治的不安的、軍事政権の正当性、政治経済を支える思想、一党独裁制や政治腐敗の問題、法の支配の不十分など、アフリカの現実に向き合った哲学を作り出すべきだ。ウィルドゥのように、アフリカの伝統概念が現代哲学の基礎たり得ないと考えるのは早計だ。迷信的でも宗教的でもないアフリカ的な道德概念は存在しており、伝統的な連帯と共同体主義をもとにしながら、道德体系や政治思想を展開することは可能である。アフリカ哲学は、伝統的思想と決別すべきではないし、できない。現代アフリカ哲学は、アフリカの人々の文化や言語、歴史的背景から抽出された諸概念を組織化して整備することを出発点にしなければならない。こうジェチェは主張するのである。

しかし、ジェチェのこの主張にもかなりの偏りがあることを指摘できるだろう。たとえば、イギリス人が日本の哲学を研究すると日本哲学への貢献となるのだろうか。もちろんそうであるが、同時に、それが英語で出版されて、他の伝統、たとえば、分析哲学を研究している者や大学院生、一般読者に影響を与えた場合には、イギリス哲学に貢献があったと言えるだろう。エマソンやローなどアメリカの環境哲学の始祖には、東洋哲学の研究からの影響が顕著であることは知られている。だからといって、彼らがアメリカの哲学者ではなく、東洋思想家だとはとても言えない。また彼らをアメリカだけの哲学だというには、日本を始めとして東洋に対する逆輸入というべき影響は著しすぎるであろう。文化の影響は、政治的な線引きを超えていく。だが、アフリカの状況、それと西洋との関係を、簡単に、西洋と東アジアの関係に比較することもできないだろう。アフリカ的なテーマを扱い、アフリカ的な概念枠をテーマにしているが、アフリカ人ではない筆者によって日本語で書かれた本論は、アフリカ哲学の一部なのだろうか、それとも日本の哲学の一部なのだろうか。筆者は両方であることを望んでいる。

したがって、問題は、①何を哲学とみなしたいか、②何を哲学の資源とみなしたいか、③誰が、誰に対して哲学の定義を行うか、④どのような政治的な立場へコミットしているかによって、アフリカ哲学の定義は変わってくるのであり、それは、経験的・事実に問題ではなく、最終的に

政治的だということである。

6 結論：アフリカに哲学はある

以上、本論では、「アフリカに哲学はあるか」という問いを追求してきた。古代エジプトのヨーロッパとアフリカ全土への影響力を考えれば、アフリカには哲学の歴史が存在した。現代のアフリカにおいても大学での講壇哲学は存在してきたし、存在している。問題は、アフリカ的な特徴を持つ哲学があるといえるかである。この問題はさらに、サハラ以南のアフリカの多くが無文字社会であることを考えたときに、アフリカの伝統的な思想・宗教・世界観を哲学と呼ぶことができるかという点に絞られる。いくつかの批判があるとは言え、賢者の哲学が示唆するアフリカにおける口承的な批判の伝統を考えたときには、それらの伝統的な思想・宗教・世界観も哲学的営為の成果であると考えられる。さらに現代では、それらの伝統を批判的に継承しようとする哲学が存在している。それゆえに、「アフリカ的な哲学も存在する」と結論してよいだろう。しかし、アフリカの哲学の対象は、伝統的文化ばかりである必要はないし、アフリカの概念枠や思考法とその解釈ばかりである必要もない。アフリカの現実、政治的・社会的問題を扱うのは、紛うことなく、「アフリカ的なテーマを扱う哲学」であり、「アフリカを哲学の対象とする哲学」である。

これまでの議論から得られるものの中で重要なのは、口承的な伝統を持つ社会においても哲学の根本特徴とされる批判的思考が成立するということである。口承の哲学が可能であることは、ソクラテスが著作を残さずとも、その対話によって哲学の代表者であることを考えるならば当然であるが、そのことがアフリカ哲学によって思い起こされたのである。エスノフィロソフィーも、賢者の哲学も、あるいはアカデミックであってもアフリカ的な概念を用いて議論を展開する哲学も倫理学も、いずれをとっても、アフリカ哲学は、西洋哲学を脱構築する。かつての西洋の大文字の哲学は、脱構築によって普遍性と統一性を奪われる。しかしそれでも、普遍性と統一性を目指した哲学的営為は可能である。普遍性と統一性がもし達成できたとしても、すなわち、世界哲学が成立したとしても、それはつねにかりそめのものであろうし、私たちをより広い思索の世界へと導いてくれるニューカマーに開かれたものでなければならないだろう。

参考文献

- 伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留責任編集 (2020)『世界哲学史』8巻 (現代、グローバル時代の知)、筑摩新書。
- 宮本正興・松田素二編 (2018)『新書アフリカ史』講談社現代新書。
- Bassong, Mbog (2007) *La méthode de la philosophie africaine : De l'expression de la pensée complexe en Afrique noire*. Paris : L'Harmattan.
- (2013) *Le savoir africain : Essai sur la théorie avancée de la connaissance*. Quebec, Canada : Kiyikaat Editions.
- (2014) *Les fondements de la philosophie africaine*. Quebec, Canada : Kiyikaat Editions.
- Bernal, Martin (1987/2007)『ブラック・アテナ：古代ギリシャ文明のアフロ・アジア的ルーツ』Ⅰ古代ギリシャの捏造1785-1985, 片岡幸彦訳, 新評社。
- (1991/2004)『黒いアテナ：古代ギリシャ文明のアフロ・アジア的ルーツ』Ⅱ考古学と文書による証

- 拠, 金井和子訳, 藤原書店.
- Boulanga, F. Eboussi (1977) *La crise du Muntu : Authenticité africaine et philosophie*. Paris: Éditions Présence Africaine.
- Bodunrin, Peter O. (1981) "The Question of African Philosophy". *Philosophy*, Vol. 56/216, pp.161-179. In Serequeberhan (1991), pp. 63-86.
- Brown, Lee M. (2004) *African Philosophy : New and Traditional Perspectives*. NY : Oxford University Press.
- Coetzee, P.H. and Roux, A.P.J. (ed.) (2003) *The African Philosophy Reader*. 2nd Edition. NY/London : Routledge.
- Crahay, Franz. (1965) "Conceptual take-off conditions for a Bantu philosophy," *Diogenes*, 52, pp.55-78.
- Eze, Emmanuel Chukwudi. (eds.) (1997a) *Race and the Enlightenment : A Reader*. Oxford : Blackwell.
- (eds.) (1997b) *Postcolonial African Philosophy : A Critical Reader*. Cambridge, Mass. Blackwell.
- (ed.) (1998) *African Philosophy : An Anthology*. Melden, MA : Blackwell.
- (2008) *On Reason : Rationality in a World of Cultural Conflict and Racism*. Duke UP.
- Deacon, Moya (2003) "The status of Father Temples and ethnophilosophy in the discourse of African philosophy" in Coetzee and Roux (2003), pp.97-111.
- Diagne, Souleymane Bachir. (2004) "Precolonial African philosophy in Arabic" in Wiredu (2004), pp.66-77.
- (2007/2011) *African Art as Philosophy : Senghor, Bergson and the Idea of Negritude*. Translated by Chike Jeffers. London : Seagull Books.
- Diop, Cheikh Anta (1955/1979) *Nations nègres et culture*. 3e éd. Paris : Éditions Présence Africaine.
- Fanon, Frantz (1952) *Peau noire masques blancs*. Paris : Edition du Seuil. 邦訳 (1970)『黒い皮膚・白い仮面』海老坂武・加藤晴久訳, みすず書房.
- Garfield, Jay L. and Edelglass, William (2011). *The Oxford Handbook of World Philosophy*. New York : Oxford University Press.
- Gbadegesin, Segun (1991) *African Philosophy : Traditional Yoruba Philosophy and Contemporary African Realities*. New York : Peter Lang.
- Gyekye, Kwame (1987/1995) *An Essay on African Philosophical Thought*. Revised edition. Philadelphia : Temple University press.
- (1997) *Tradition and Modernity : Philosophical Reflections on the African Experience*. New York : Oxford University Press.
- Hallen, Barry (2000) *The Good, the Bad, and the Beautiful : Discourse About Values in Yoruba Culture*. Bloomington : Indiana University Press.
- (2006) *African Philosophy : The Analytic Approach*. Trenton, N. J. : Africa World Press.
- (2009) *A Short History of African Philosophy*. 2nd rev. ed. Bloomington : Indiana University Press.
- Hallen, Barry and J. Olubi Sodipo (1986) *Knowledge, Belief and Witchcraft : Analytic Experiments in African Philosophy*. London : Ethnographica Ltd. (Revised edition 1997, Stanford University Press).
- Houtondji, Paulin (1970) "Comments on Contemporary African Philosophy". *Diogenes*, 71, pp.120-140.
- (1996) *African Philosophy : Myth and Reality*. Second Edition. Bloomington and Indianapolis : Indiana University Press.
- (2002) *The Struggle for Meaning*. Athens : Ohio University Center for International
- (2013) *Sur la «philosophie africaine» : Critique de l'Ethnophilosophie*. Bamenda, Cameroon : Langaa Research & Publishing.
- Horton, Robin (1993) *Patterns of Thought in Africa and the West : Essay on magic, religion, and science*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Imbo, Sam Oluoch (1998) *An Introduction of African Philosophy*. Boston : Rowman and Littlefield.
- (2002) *Oral Traditions as Philosophy : Okot p'Bitek's Legacy for African Philosophy*. Lanham, MD : Rowman & Littlefield.

- Janz, Bruce B. (2009) *Philosophy in an African Place*. Lanham, MD : Lexington Books.
- Kanu, Ikechukwu Anthony (2018) *Disciplines of African Philosophy*. Bloomington : Authorhouse.
- Karp, Ivan and Masolo, D.A. (eds.) (2000) *African Philosophy as Cultural Inquiry*. Bloomington : Indiana University Press.
- Kagame, Alexis (1956) *La Philosophie bantu-rwandaise de l'Être*. Bruxelles : Académie Royale des Sciences Coloniales
- (1976) *La Philosophie Bantu Comparée*. Paris : Présence Africaine.
- Kodjo-Grandvaux, Séverine (2013) *Philosophies africaines*. Paris : Présence Africaine.
- Lalèyè, Issiaka-Prospère L. (2003) "Is there an African philosophy in existence today?" in Coetzee and Roux (2003), pp.86-96.
- (2010) *20 questions sur la philosophie africaine*. 2ème édition. Paris : L'Harmattan.
- Lévi-Strauss, Claude (1962) *Pensée sauvage*. Paris : Librairie Plon.
- Masolo, D. A. (1994) *African Philosophy in Search of Identity*. Bloomington and Indianapolis : Indiana University Press.
- (2004) "African philosophy in the Greco-Roman era" in Wiredu (2004), pp.50-65.
- Mana, Kä (2018) *Philosophie africaine et culture*. Beau Bassin, Mauritius : Editions universitaires européennes.
- Maurier, Henri (1984) "Do we have an African philosophy?" in Wright (1984), pp.25-40.
- Mbiti, John S. (1969) *African Religions and Philosophy*. London : Heinemann Educational Book. 邦訳 (1970)『アフリカの宗教と哲学』大森元吉訳、法政大学出版会.
- Mbonda, Ernest-Marie (2013) *La philosophie africaine, hier et aujourd'hui*. Paris : L'Harmattan.
- Mono Ndjana, Hubert (2009) *Histoire de la philosophie africaine*. Paris : L'Harmattan.
- Mosley, Albert G. (1995) *African Philosophy : Selected Readings*. Upper Saddle River, NJ : Prentice Hall.
- Mudimbe, Valentin-Yves (1964) "Humanisme et négritude", *Présence universitaire*, 14, pp. 5-13.
- (1970) "Négritude et politique, dans Hommages d'hommes de culture", *Présence africaine*, pp. 276-283.
- 1988. *The Invention of Africa*. Bloomington : Indiana University Press.
- Niamkey-Koffi (2018) *Controverses sur la philosophie africaine*. Paris : L'Harmattan.
- Obenga, Théophile (1998) "Egypt : Ancient history of African philosophy" in Wiredu (2004): pp.31-49.
- Olea, Henry (1998) "The African foundation of Greek philosophy", in Eze (1998) : pp.43-49.
- Onyewuenyi, Innocent (1991) "Is there an African philosophy?" in Serequeberhan (1991), pp.29-46
- Oruka, H. Odera (Ed.) (1990) *Sage Philosophy : Indigenous Thinkers and the Modern Debate on African Philosophy*. Leiden : E.J. Brill.
- (1991) "Sagacity in African philosophy," in Serequeberhan (1991), pp.47-62.
- Outlaw, Lucius, T. (Jr.) (1996a) "African, African American, Africana philosophy" in Eze (1996), pp.23-42.
- (1996b) *On Race and Philosophy*. New York and London : Routledge.
- (2007) "What is African philosophy?" *Philosophy in Multiple Voices*. George Yancy (Ed.), Lanham : Rowman & Littlefield, pp.109-143
- Ramose, Mogabe B. (2003) "The Struggle for reason" in Coetzee and Roux (2003): pp.1-8.
- Serequeberhan, Tsenay (1991) *African Philosophy : The Essential Readings*. St.Paul, MN : Paragon House.
- (2012). *The Hermeneutics of African Philosophy : Horizon and Discourse*. NY/London : Routledge.
- Temples, Placide (1945/1959) *Bantu Philosophy*. Paris : Éditions Présence Africaine.
- Towa, Marcian (1971) *Léopold Sédar Senghor : Négritude ou Servitude ?* Paris : CLE.
- Wiredu, Kwasi (1980) *Philosophy and an African Culture*. Cambridge : Cambridge UP.
- (1996) *Cultural Universals and Particulars : An African Perspective*. Bloomington and Indianapolis : Indiana University Press.
- (ed.) (2004) *A Companion to African Philosophy*. Malden, MA : Blackwell.

Wright, Richard, A. (1984) *African Philosophy : An introduction*. Third edition. Boston : University of America.

謝 辞

本論文は以下の日本学術振興会科学研究費助成事業の成果の一環である。新学術領域補助金計画班「顔と身体表現の比較現象学」(17H06346)、基盤研究 (A)「生態学的現象学による個別事例学の哲学的基礎付けとアーカイブの構築」(17H00903)